

京鹿子

第一二九号
九月一日發行
（每月一回一日發行）

9月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その二十四

病 葉 拾 ぶ 晩 学 の 広 き 門

雪 溪 の 裾 野 クレ パ ス 十 二 色

雪 溪 や 村 の 鎮 守 の 青 々 と

尺 蠖 の 縫 ひ 目 を 解 く 政 治 記 者

文 束 を ひ た す ら 秘 せ り 紙 魚 の 恋

恋 綴 る 夜 の ト レ モ 口 秋 近 し



夏草を手繰る慟哭の野生群
糶り蛸の奥の手といふ九本目
金魚すくひ弱気の腕の見せどころ
飛び石の亀の浮遊や夏帽子
蝉涼し杜の小川の風あそび
月涼し瀬見の小川を訪はむ
神涼し二川の睦む原生林
穂の孕む月瀬の青田母の色

近詠

鈴鹿 仁

鏡絵馬

初蟬や美人百笑かがみ絵馬（下鴨神社）

滴りは山の涙線雲湧かす（〃）

でで虫の角の向かふの旅へゆめ（〃）

梅雨明けてふはり神くる杉木立（〃）

朝顔に綺麗なことば掛けてみる



—
近 詠
—

和田 照海

青岬

曳船の門浪がかりや青岬

桑の実の三つ目青き昭和旧る

一雨に咲き二雨に夏椿

竜吐水とろとろ垂れて夏書寺

水嵩の濁りを囃す行々子



英華採集

落し文謀議の委細つらつらと

京 都 大西 逸子

どの時代にも世の転覆を企て様々な場所で謀議を重ねた史実が語り継がれている。鹿ヶ谷事件は、その最たるものであろう。「落し文」は、何とも風雅で俳諧味のある季語であるが昔の人は、これを鶯やほととぎすの仕業とみている。もしも、謀議の発覚が小鳥によるものであると当時の首謀者が知れば、彼等は何と思うであろうか？これ程愉快な話はないだろう。

夏のれん京の川風はらみたる

和歌山 辻本 俊子

京都鴨川の川床料理は、夏の季節の定番であり人は挙つて涼を求めて先斗町へと繰り出してゆく。京の川風だけでは鴨川の断定までには至らないが、季語の「夏のれん」を置くことよつて読み手は、京都の「川床」へとイメージを膨らませる。そして、鴨川から眺める裏の床棧敷は風物詩であるが、表側には名代の夏のれんが風を孕んで京都の趣をしっかりと出している。

ああ言へば斯う言ふ金魚ひらひらす

京 都 塩 見 かず子

夏の暑さを凌ぐには、エアコンも良いが窓を開け放しにして軒下に吊るす金魚玉に涼を求めてみるのも一興である。金魚玉の金魚に日頃の愚痴を呟いてみたのであろうか？金魚も泡（あぶく）を吐き出してそれに応えている。何とも言えない日常の一駒を切り取っている。下五の「ひらひらす」は、作者の「ありがたい」に対しての金魚の「どういたしまして」に違いない。

松本 鷹根

残 照

夏至の富士旅の夕餉に残照す

さくらんぼ熟れて邪念を払ふ空

父の日や反省数多独酌す

背を流る汗を意識し石に坐す

白余す夾竹桃や写経寺



近 詠

塩貝 朱千

森のカフェ

大山木真白にシヤンパン注ぎたし

蓮アイス舐めてあふみの蓮消ゆる

いかづちや震へ咲くかに悪魔の手

森のカフェ大窓にみどり風走る

しやぼん玉追ふ少女を追ふ少年



神麓集

油照り 藤岡紫水

人脈も金脈もなく大晝寝
追憶の影曳く雨の月見星
一水の翳に動かず枝蛙
汲み置きの水が泡立つ油照り
白雲の湧き立つ雨後の遠青嶺

今日の月 沼田巴字


新涼や名もなき草のさゆれにも
叱られてひそむ納屋口虫時雨
秋の虹隣家の人の告げくれし
浮遊せば父母とも会はむ今日の月
名月の落ちゆく先や壇ノ浦

虹の橋 丸井巴水

涼風の限界にゐてペン重し
虹の橋妣は裏見の遠きより
眼帯の奥へ銀河の溢れ来る
花菖蒲フランスパンを太刀持ちす
ロマンスは置き去る白髪みどり風

木下闇 植村蘇臣

木下闇入りて靈感新たなり
木下闇悟りの境地ふた三言
深海の如し雲間の夏の空
福耳と言はれ賤無し心太
九条のありて今日あり柿の北



神麓集

犧 打 北川孝子

人生の犧打想ふ夜の火蛾狂ふ
蜘蛛の子の散りて地軸のゆらぎかな
胸襟をひらきし一步夏のれん
来し方に悔の数多や火蛾今宵
夜の薄暑記憶たどれば遠去かる

紫陽花 直江裕子

紫陽花を見にきて匂ひ袋買ふ
崩れさうなままでそれでも夏に入る
新緑に攻められてゐる恍惚
墓いまだいつも後から地震学者
夕紫陽花うなづくまでの長きこと

花菖蒲 高木晶子

蝶飛んで三条小鍛冶碑と言へり
兄弟に少し距離あり枇杷の種
馬齢とかなんじやもんじやの花盛り
ゆすら梅川下へ種売りにゆく
年輪をほどくかに揺れ花菖蒲

スロージャズ 伊藤希眸

緋牡丹や不貞といふ字見当らぬ
五月来る抱き廻して嬰の笑顔
何もなき母の日ひとりスロージャズ
苔の花碑文字の読めぬ爺と婆
ひきがへる聖人のやう構へぬる



反省 木戸渥子

著莪の花 井上菜摘子

嘘少々あぢさゐの毬膨張す
癌の字に口が三つも青嵐
後期高齢水に飽きたる水中花
二人して外食嫌ひ冷奴
雷鳴や夫への小言癖反省

夏の夜のロックひとりの弦を張る
毛虫焼き平らかな日となりしかな
街薄暑ふとのつぺらぼうの私
老鶯やつぎの科白が見えてゐる
片耳に日暮れ来てをり著莪の花

スルタン 奥田筆子

木下闇 村田あを衣

管楽器一斉に立ち実草かな
失語して螢火ひとつ漕ぎ寄する
スルタンを虜にしたり月下美人
薔薇動悸悪事に加担せしごとく
イタリアのサンダル体感土不踏

木下闇一揆塚とは石ひとつ
木下闇からす三羽は謀議中
今むかし煉瓦館の蔦若葉
代官所あとの構へや花菖蓮
人は人絮たんぽぽの着地かな



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

薔薇垣根隔てロミオとジュリエット 京田 山中志津子

追伸に都忘れを二三行

白川の流す今昔夏のれん

神鶏の競ひ鳴きする木下闇

蜘蛛は巣を人は虚言を吐く濁世

新樹光天の磐戸の開かれて 京 井尻 妙子

見開きの左右満載のみどり

青葉風母のあしたへ干す肌着

そだけがモノクロとなり蜘蛛の子散る

混み合うて祭にゆづる賀茂街道

白桃の領域へとは踏みこめず 城 鷺山 珀眉

遠花火ひき波さらふ忘れ貝

乱読の時間の外をばつた跳ぶ

虎尾草の吹かれ豹変なんてこと

噴水や集積回路めく真昼

柿の花いつしか柿の実のかたち 京 片山 熙子

ほととぎす朝の心音聴きに来る

星屑になりてもひかる蛍籠

身のあちこち軋む音して麦の秋

留守中も京鹿子草華やぎて

河口とは佇むところ夕ひぐらし 福山 亀井 福恵
かたねりの闇を震はせ野分立つ
曲輪跡燠のごとくに曼珠沙華
白桔梗はらから散居してをりぬ
新涼やパンプスよりもスニーカー



落し文謀議の委細つらつらと 京 都 大西 逸子
薫風や金魚田ひろがる城下町
懸命に鰭をふりふり屑金魚
紙風船少女のきれいな息をたす
夏のれん京の川風はらみたる 和 歌 山 辻本 俊子
太平洋きめこむ蜘蛛の子だくさん
彌宜が杳砂利を鳴らせり京薄暑
みどりさす神丘の句碑しばし立つ
ああ言へば斯う會ふ金魚ひらひらす 京 都 塩見かず子
青梅や医者になりたき夢などと

船遊びしぶきに応ふ石のこゑ
梅雨闇の丸屋にひそと義公来る
箒目を調ふ巫女や青楓 アリソナ 伊吹 之博
紫陽花や異国の空の彩を出す
紫陽花や私ごのみのリトマス紙
葉隠れの十二単や吉兆虫
五月の風青空を背に木の葉ゆれ
雲ふんはり凧の時間や音もなく
ソチコチにタンポポ笑ふ又一年
庭の芝みどり光るや雨のあと
春の朝フライパンにも語りかけ 札 幌 野村 軻枝
青嵐下山の人の瞳にも
熊談義ひとしきりして山開き
筍を赤子の如く分け呉るる
蕨狩り先採りされて臍かめり 酒 田 藤波 松山
睡蓮や遙に思ふモネの午後
甘野老痛む心により添ひぬ あまどころ
五月雨や駆込む男女駐車場
奥座敷五月人形五十年
武具飾る子を案じつつ五十年
暑さ去るを待つ食の量豊か
亡き妹へ語りつつがんや七変化 洪 川 東 秋茄子